



東洋英和女学院

史料室だより No.98

2022.5.10 発行
東洋英和女学院
史料室委員会



◆ 東洋英和女学院創立八十周年記念音楽会（1964年11月7日 厚生年金会館にて）

東洋英和では周年の際に盛大な音楽会が開催されてきました。写真右上は、創立八十周年記念音楽会での短期大学生による女性三部合唱、指揮は大中寅二先生です。写真左下は、小学部4・5・6年生による合唱、指揮は照屋美和子先生です。

◆ 目次

特集 東洋英和の音楽教育③

小学部の音楽教育 ―歌を通して 心をはぐくむ―

加藤 牧菜 …… 2

21世紀の小学部音楽授業

山内 桜子 …… 5

特集 東洋英和の音楽教育④

短期大学保育科―かえで幼稚園―大学保育子ども学科

―歌うこと・賛美すること・共に響き合うこと―

大漣 知子／小井塚ななえ …… 6

〈資料紹介〉40 中高部「道（ことば）」45年の変遷

神藤 真理 …… 10

〈東洋英和の先生がた〉8 栃内 禮子先生

自己研鑽に裏づけられた 子どもを活かす教育実践 …… 12

利用統計／史料室の活動より（2021年10月～2022年3月） …… 14



小学部の音楽教育 ―歌を通して 心をはぐくむ―

加藤 牧菜

こどもさんびか

小学部に入学して最初に覚えたのは讃美歌だった。6年間の生活はつねに讃美歌と共にあり、講堂で、教室で、校庭で、毎日声を合わせた。譜面を目で追いながら次々と新しい曲を覚えていくのだから、それだけでも間違いなく音楽教育の大きな礎になっていたに違いない。

史料室の所蔵資料によると、戦後は学校独自に編纂した讃美歌が数年おきに発行されていたようだ。1966年、日本基督教団出版局から『こどもさんびか』改訂版が出されると、小学部でもこれが翌年度から採用された。この改訂版では歌詞が口語中心になり、子どもが歌いやすいものになっていた¹。

これに合わせて1967年9月「小学部さんびか委員会」により『こどもさんびか 英和版』が発行された。『あいのわざ』（小さいかごに）や『あしたにゆうべに』（種をまけ）など、筆者の在校時代（1983-1989年）の人気曲は、この『英和版』の中に収められた。私たちは『こどもさんびか』と『英和版』冊子を糊付けして使用した。1990年代初頭、青い表紙の1987年版『こどもさんびか』（日本基督教団讃美歌委員会編）に取って代られるまで、20数年間、2冊セット体制が続いたようだ。



戦後から使用されていた小学部独自で編纂した『さんびか』



（左）日本基督教団出版部の『こどもさんびか』と『英和版』の合本
（右）1987年版『こどもさんびか』（日本基督教団讃美歌委員会編）

小学部の教育改革

1960年代、小学部は大きな転換期を迎えていた。1960年に講堂が落成、創立八十周年の1964年には、格調高い『校歌』に加えて子どもたちが親しみを持って歌える『東洋英和の歌』が作られた²。1966年に音楽室などが特別教室として2階に増築され、学校全体で教育内容の見直しが始まった。教員が多くの時間をかけて授業内容の細部まで検討した結果は、「東洋英和女学院小学部教育課程」としてまとめられ、文部省による指導要領を考慮しつつ、1973年に英和独自のカリキュラムが実施された。

当時、音楽科の専任教員として、この新しい教育課程の編成に携わっておられたのが、照屋美和子（てるや・みわこ）先生である。公立学校と比べて少ない授業時間をうまく活用し、歌唱を音楽教育の中心に据える決心をされたという。「音楽科教育計画」には、小学部の音楽教育の骨子が先生ご自身の言葉でしっかりと刻まれていた（表1）。

今回これを初めて読んで、はっとした。私たちが教わった歌の一つ一つには、大事な教育的意図があったのだ。単に「みんなで楽しく歌いましょう」というだけではない、指導者の熱い思いがあったことに気づかされた。



照屋美和子先生
（近影）

音楽科教育計画〈音楽科指導目標〉

1. 優れた音楽が分かり、それに感動できる子どもにする。
2. 全身全霊をあげて歌える子どもにする。（表面的に歌うのではなく、曲の本質を理解して歌う。）
3. 曲のイメージを明確に持たせ、内容を豊かに表現する。
4. 曲を通してパート同士の対応や交流を作り出すことにより、子ども同士の心の結びつきをつくる。
5. 全校合唱、全校音楽の日、学芸会などの音楽的行事を通し、他学年との交流を作ることにより、心の結びつきをつくる。
6. 一つの曲を仕上げて行く中で、明確な課題を与え、努力し工夫し、高いものを求めて追求して行くことの喜びを味わわせる。

表1（照屋先生ご所蔵の資料より作成）

声を出して心を開く

照屋先生は1960年から35年の長きにわたって、小学部の音楽教育を担われた。本稿の取材で久しぶりにお目にかかったが、お変わりなくお元気で、今も教会で合唱指導をしていらっしゃるという。先生は東京学芸大学2年生の時、ピアノから声楽へ転向された。「私、人前で話すようなタイプじゃなかったのよ。でも、歌うことで性格が明るくなって、体を使うことで心が自由に開くような気がしたの。」大学を卒業し、中学校で講師をされた後、小学部の専任教員になられた。

着任したばかりの照屋先生に、当時の部長・外崎長三郎先生が、子どもたちをもっと元気に歌わせてほしいと依頼された³。そこで、まずはどの子も体を使ってしっかり声を出して歌えるようになることを目指されたという。照屋先生ご自身も、サレジオ教会のダル・フィオール神父のもとでベルカント唱法⁴を学ばれた。声帯の位置を指で確認し、声帯をきちんと合わせて「あ！」と声を出す発声練習を覚えている卒業生も多いだろう。

先生は「校庭のいちょうの木まで届くように歌ってみよう」から「校門まで届くように」「六本木の交差点まで届くように」と、子どもたちのイメージを広げながら、のびのびと声を出させていた。『大きな石』『みんなで行こう』『子どもの村』など、いつも講堂いっぱい元気な全校合唱が響いた。思い切り大きな声で歌えば子どもたちの心が開く、その信念が先生の指導の根底にあった。

歌を通して学ぶ

初めは全員が同じメロディーを歌う「斉唱」、次に「輪唱」で合唱の基礎を学び、二部合唱、三部合唱、四部合唱と進む。学年が上がるごとに音域も広がり、音楽的な内容も充実する。「合唱って、他のパートを聞いて、他の人のことを考えて合わせなくちゃいけないでしょ。それを通して心の結びつきを作りたいと思ったの。」

特に高学年には、なるべく芸術性の高いものや宗教的な作品を選曲されたという。ベートーヴェン『自然における神の栄光』、ハイドン『天は御神の栄光を語り』（オラトリオ『天地創造』より）、ヘンデル『ハレルヤコーラス』など、子どもにとって取り組み甲斐のある曲も多かった。学芸会や全校音楽の日（学芸会が隔年開催になった際に開始された行事）などで、上級生の歌を羨ましく聴きながら「〇年生になったらあの歌が歌える」と心待ちにしていた児童も多かった。これも、学年を超えた一つの結びつきだった。



合唱する子どもたち（学芸会にて）。指揮をしているのは照屋先生。

歌の学習には、国語教育の要素も多く盛り込まれた。言葉の意味をよく考えて歌うことに重点が置かれ、同じ歌をいろいろな表情で歌うことも多かった。たとえば授業で『かにさん』⁵を歌う時には、先生は「どんなかに？」「どんな風に動くのかな？」と問いかけた。子どもたちは活発に意見を出し様々な歌い方で繰り返し歌った。

「子どもたちにどんな言葉をかけたらいいか、どんな風に指揮をしたらいいか、夢に見るほど研究したわ」と先生は笑う。授業を録音して家で聞き直し、毎日指導法の改善を考えたという。1968年からは教育者・斎藤喜博先生⁶の研究会に参加し、子どもを育てる姿勢を学び続けられた。照屋先生の本棚には、膨大な研究資料が並んでいた。

鼓笛パレード

運動会にも音楽のプログラムがあった。午後一番に行われていた「鼓笛パレード」である。5、6年生全員が夏服の上衣の下にスカートをはき、白い帽子をかぶって、楽器を演奏しながら校庭を行進する。曲はツイーマン『錨を上げて』。米国海軍の行進曲だが、同名のミュージカル映画でも有名だ。二声のリコーダーでメロディーが何度も繰り返され、その間に列の隊形が次々と変わった。筆者は毎年涙が出るほど感動したものだ。

1962年、外崎部長先生が外遊からお帰りになった際、校庭で少人数の「鼓隊」がお出迎えした。これが非常に好評で、翌年度から「鼓笛隊」として運動会のプログラムに加えられたようだ。1967年の運動会の記録には「鼓笛パレード」と記載されている。照屋先生のお話によると、初めは毎年フォーメーションを変えていたが、図1の形に落ち着いたようだ。

「歌中心のカリキュラムの中で、鼓笛パレードに向けて器楽学習の細い線を作っておいたの。」6年生になると、授業中に小太鼓の練習やテストがあった。運動会が近づくと、希望者の中から旗のついたバト

ンを上下する主指揮・副指揮、打楽器の奏者が20人ほど選ばれ、白いスコートをはいてパレードを先導した。このパレードは2004年に曲が変わり、その後ドラムコーへと形を変えて2015年まで行われた。



鼓笛パレード (1989年)

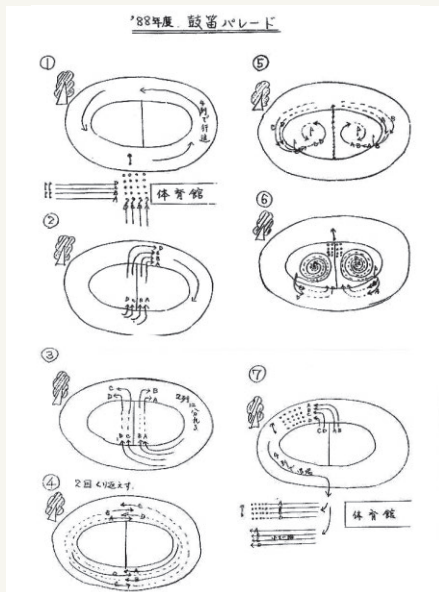


図1 (筆者所蔵資料)

合唱クラブ

筆者は4～6年生のクラブ活動でも照屋先生にお世話になった。主にオペレッタを行った「合唱クラブ」である。先生が着任された頃には「音楽クラブ」が存在し、合奏や合唱が行われていた。クラブ活動全体がいまいち振るわず、学校として見直すことに



合唱クラブのクラブ発表 (1990年)。現在ソプラノ歌手として活躍する宮本彩音さんが主役を演じた。

なったときに、先生は「合唱クラブ」という名称にして継続することを選ばれた。初めは普通に並んで『流浪の民』や『アヴェ・ヴェルム・コルプス』などを歌っていたそうだ。そのうち、数人が前に出て歌ったり演技をしたりして、少しずつ劇の要素が加わり、最終的にはオペレッタをやるようになったという。

「合唱クラブの子たちが育つことで、普段の授業にも良い影響が出たのよ」と、照屋先生はアルバムの束を出してきてくださった。めくってみると、子どもたちが生き活きと歌っている様子と、先生手作りの色鮮やかな衣装が目飛び込んでくる。そこには現在、音楽家や女優として活躍する先輩・後輩も大勢写っていた。

聖歌隊

歌う課外活動でもう一つ印象に残っているのは、聖歌隊である。1960年代の小学部の記録にも「聖歌隊」というキャプションの写真は残っているが、クリスマス礼拝の際に高学年が歌うなど、あくまで臨時的なものだったらしい。堤治子先生 (1952年～1982年在任) のご尽力で1974年に正式に発足した。

4～6年生の希望者が所属し、主に水曜の放課後に練習が行われた。礼拝で歌う際には白いガウンを着用して講堂の後方の席で歌った。練習時のお祈り当番などもあり、一人一人が責任を持って参加することが求められた。

筆者が在籍した頃は、川村悦子先生 (1982年～2001年在任) が、とても丁寧に指導をしてくださった。歌詞の文語の意味を説明してくださり、子音や鼻濁音の発音の仕方なども細かく教えてくださった。先生が選ばれる曲は、半音の動きや減七の和音が使われている大人っぽいものが多く、ハーモニーを作るのが楽しかった。クリスマスに歌った、アダン『きよらに星すむ今宵』(さやかに星はきらめき) や J.S.バッハのカンタータ140『目覚めよと呼ぶ声が



全校礼拝での聖歌隊奉仕 (1982年)。指揮をしていらっしゃるの川村先生。

聞こえ』の第4曲『シオンは物見らの歌を聞けり』などは、忘れられない思い出の曲になった。

最後に

小学部での思い出は音楽に彩られている。音楽を通して、体を使うこと、何かに一生懸命取り組むこと、他者と心を合わせることを学んだ。素敵なものに憧れ、自分なりに工夫して表現することを学んだ。それは大切な日本語教育であり、キリスト教教育であり、何よりも豊かな心をはぐくむための教育だったのだと改めて感じている。

〈註〉

1. 小宮郁子。「子ども賛美歌の歴史」：礼拝と音楽。日本キリスト教団出版局。2012年8月(154号)。
2. 教職員・生徒から歌詞を募ったが応募が少なく、中高部の国語教諭・鶴沼幸先生が作詞された。作曲は富岡正男先生。
3. この逸話は「史料室だより」No.40に詳しい。
4. イタリアの伝統的な発声法。「美しい歌」の意。
5. 歌集「こかげ」に収載。キャンプソングも多く収められたこの歌集は、追分の夏期学校でも長く愛用された。1960年以前に富岡先生が編纂なさったようで、69番『かにさん』以降は照屋先生が追加されたという。「こかげ」が生まれた経緯をご存じの方は、ぜひ史料室へ情報をお寄せいただきたい。
6. 教育研究家(1911-1981)。「島小教育」として有名な先進的な教育実践活動を行った。



〈執筆者プロフィール〉加藤 牧菜 (かとう・まきな)

1989年東洋英和女学院小学部卒業、1995年高等部卒業。筑波大学生物学類卒業、同大学院生物科学研究科博士課程修了(生命倫理専攻)。京都大学で研究員として勤務後、(株) オフィスマキナ設立。科学・医療分野のコミュニケーション・コンサルタントとして多数の研究事業に参加。学生時代より演奏会企画を始め、異色のプロデューサー/ピアニストとして活動。教育公演も多く手掛ける。往年の洋楽ポップスを演奏する楽団マキナ・アンド・カンパニー主宰。日本大学芸術学部非常勤講師。



21世紀の小学部音楽授業

小学部音楽科 山内桜子

21世紀になってからの小学部音楽授業の大きな変化と言えば、ハンドベル演奏の開始と鼓笛パレードの廃止であろう。

ハンドベルは、一人ひとりの音が集まってひとつの音楽を作り上げていくことが、聞き合い協力し合う気持ちを育てるのではないかと考え小学部でも導入した。「この音を鳴らすのは私だけ」という責任感と緊張感が、よい成長の機会となっているように感じる。6年生は全員が授業で取り組んで全校礼拝で奉仕する他、希望者で構成されるエンジェル・リングーズは、志願者保護者向け行事での奉仕や、ハンドベル・フェスティバルやチャリティ・オルガンコンサートでの演奏など多岐にわたる活動を楽しんでいる。

鼓笛パレードは紆余曲折の末、廃止となった。音楽科として惜しむ気持ちがないでもないが、運動会が「スポーツ」そのものに集中できる日となったことの意義は大きいと感じる。

この他にも、入学してすぐの1年生が取り組む聖書物語の歌、東洋英和の歴史を歌う「六万枚の楓の葉っぱ」、全校生でアリアを歌い上げて作る「みんなで歌うオペラ」シリーズなどは、東洋英和の音楽教育の流れを汲んだものである。また、梨花女子大学附属初等学校と姉妹校となり、本格的な交流を始めた事がきっかけとなり、篠笛もカリキュラムに導入した。日本の文化を紹介するひとつの手段として、スーツケースに気軽に入れられる篠笛が将来何かの役に立てば、と願っている。

この数年はコロナ禍となり、感染防止のため歌やリコーダー演奏への厳しい制約が課せられている。小学部では講堂やプレイルームなど広い空間の使用を許され、マスクは着用したままとはいえ「音楽の時間にはのびのび歌える」と子どもたちが感じられるように、換気や清掃などに気を配りつつ、歌声の響く音楽授業を守っていきたくと考えている。



コロナ禍なので、観客に見立てた全校生の似顔絵の前で演奏する1年生

短期大学保育科—かえで幼稚園—大学保育子ども学科 —歌うこと・賛美すること・共に響き合うこと—

大漣知子 (大学附属かえで幼稚園) / 小井塚ななえ (大学人間科学部保育子ども学科)

1973年に当時の短期大学の附属園として創設されたかえで幼稚園は、1998年には大学附属かえで幼稚園と改められ、本年50年目の歩みへと導かれています。その間、子どもたちと教師たち、そして保護者の方々がたの日日にはいつも歌がありました。礼拝の中の賛美の歌、子どもたちが教師と共に輪をつくり季節や生活を楽しむ歌、誕生日会や行事の中での喜びの歌…それだけではありません。子どもたちの口からは、ままごとをしながら、砂遊びをしながら、ブランコにゆれながら、空を見上げながら…、自然に歌がこぼれてきます。本来、人間には歌うことが呼吸することと同じように備えられていると幼子を見ていても感じさせられます。心の表現として、また安らぎや楽しみとして、神さまへの賛美として、歌うことは生活の一部です。

園の教師は、そこにキリスト教保育の場としての、また幼児の豊かな感性を育み文化を伝える教育の場としての、願いと意図をもって歌を伝え、共に心を響かせ合う時間を大切にしてきました。

「音楽教育」の意味する範囲は広く、ことば・楽器・身体表現・ダンス…等、様々にからみあってあるものですが、この度は「歌」を通し、かえで幼稚園が短期大学保育科から受け継いできたことをふりかえります。また大学の人間科学部保育子ども学科との連携において、これからの保育、そして保育者養成に、英和の伝統をつなげていきたいと願っています。

1. 「保育だより」から見る子どもと共にある「歌」

かえで幼稚園創設時より保護者に向けて毎月発行し続けてきた「保育だより」には、月の予定と共に、保育や子育ての中で大切にしたいこと・子どもたちの園での生活や遊びの報告を載せています。その中で、誌面が許される限り、子どもたちの歌っている讃美歌や歌が紹介されてきました（近年は著作権に配慮しての掲載をしています）。

ガリ版刷りの時代には楽譜は手書きであり、鉄筆で五線譜を描くことは大変なことであったと思います。「保育だより」に初めてコピーした楽譜を載せたのは1986年で、それ以降はほとんどコピーの楽譜を切り貼りして原稿を仕上げていました。この「楽譜を手書きで描く(写す)」という作業は、自分持ちの楽譜をつくる際にも必要なことでしたが、その手間が歌を覚え歌に親しむために意味があったと、簡単にコピーができる時代に慣れた今、改めて

思います。

「保育だより」に載せられている歌は、その月に子どもたちの歌っていた歌の中のごく一部ですから、統計としての正確な判断はできません。しかし、以下の5点の特徴は十分に読み取れます。①キリスト教保育の園として讃美歌を大切に歌い伝えていたこと、②短期大学の教育が生かされ実践されていたこと、③土橋克子先生（創設時に東洋英和幼稚園からかえで幼稚園に移籍されてきた保育現場のリーダー）によって宣教師の先生がたから受け取った歌や東洋英和幼稚園で歌い親しんでいた歌がかえで幼稚園でも歌い継がれていたこと、④キリスト教保育連盟を通して伝えられた歌が多く取り入れられていること、⑤富岡正男先生の作られたこどもさんびかや子どものうたが長く親しまれていること。それぞれの特徴について画像①～⑤を交えながらご紹介したいと思います。



毎月発行の「保育だより」には、右掲の様々な讃美歌集、歌集からの歌が紹介されている。



「こどもさんびか」「幼児さんびか」



大中寅二先生の作品集より

① 「保育だより」には、「こどもさんびか」（日本基督教団出版局編）や「幼児さんびか」（キリスト教保育連盟編）をはじめとして、各教派の出している「讃美歌集」からの歌が幅広く載せられています。学院のどの部でもそうでしょうが、園生活の中で賛美することをいかに大切に、喜びをもって歌っていたかがわかります。「保育だより」に載せることにより、神さま・イエスさまのみこころを、保護者とも共有できることへの願いは現在にもつながっています。

② 短期大学の教えは、子どもたちの音楽教育（音楽環境）全般に生かされていました。

それは「史料室だより」No.97の「東洋英和幼稚園の音楽教育」で述べられている宣教師の先生がたの思いの継承であり、保育科の先生がたから教わったものの実践でした。

私（大漣）は1978年に短期大学に入学し、大中寅二先生の最後の学生でした。讃美歌・歌曲・そして多くの子どもの歌に出会わせていただき、奏楽や作曲を教えていただきました。短大・大学で長く音楽教育・教会音楽を担われた飯島千雍子先生は、「保育科で作曲を教えるところは少なく、これは東洋英和の特徴」と言われています。「保育だより」にも、教師が作った歌が多く載せられていますが、大中先生の教えが生かされていたのだと思います。伝えられた大中先生の歌は、日本の四季や自然、また子どもの気持ちを表わす葛葉国子さん・深山澄さんをはじめとする方がたの詞に、穏やかで軽やかなメロディーとリズムを合わせて作曲されたものであり、その後もずっと歌い継がれ、「保育だより」にも続けて掲載されています。

③ 土橋克子先生がかえで幼稚園に持ち込まれた歌は前述の大中先生作曲による歌も多くありましたが、1956年に「ろばの会」が編集し音楽之友社から発行された「新しいこどものうた」に載せられている楽しく美しい歌も数々ありました（大中先生の息子さんである大中恩さんも編者のお一人です）。それらは、今も東洋英和幼稚園でもかえ

で幼稚園でも折々に歌われています。ちなみに、「保育だより」に最初に載せられている歌は「新しいこどものうた」の中の歌「びわ」でした（1973年6月号にて）。

④ キリスト教保育連盟発行の月刊誌「キリスト教保育」の中で紹介された歌、また「幼児さんびか」「幼児さんびかII」「クリスマスのうた」に載せられている讃美歌（キャロル）も長く歌われてきました。特に、1976年に発行された「こどものうた—おひさまおはよう—」には、その前書きに「さんびかではなく、さんびかに準じた生活の中でうたわれる歌」と書かれているごとく、神さまの愛の中で育つ子どもの生活を豊かに彩ってきた歌がたくさんあります。その編集に関わられた元短期大学教授・本学名誉教授の芝恭子先生がカナダ留学からのお土産として持ち帰られた歌もあり、私自身短期大学の授業で先生から教わった時の楽しさを大切にしています。

⑤ 1978年にこどものさんびか同人会が龍吟社から発行した「こどものさんびか《こどもとおかあさんのうた》」の中にある富岡正男先生の歌も、子どもたちに歌い続けられてきました。特に「アドベントクランツに」は、1983年から現在に至るまでほぼ毎年の「保育だより」12月号に載せられています。

子どもの歌はこれだけではありませんが、これら①～⑤は引き続き現在も大切に歌われています。また短期大学保育科から大学人間科学部保育子ども学科への移り変わりの中で、早川史郎先生・眞理ヨシ子先生を通して学生に伝えられた「歌」が子どもたちの中で歌われ、「保育だより」に紹介されるようにもなりました。

2. 「歌」（音楽）を通しての節目の時

—学院・大学との繋がりの中で—

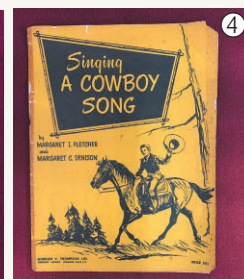
歌うこと、歌を聴くことは生活の中に散りばめられています。また、折々に教師たちが子どもたちのために準備して歌や音楽を届けること、教育実習生



「新しいこどものうた」



「おひさまおはよう」
「クリスマスのうた」



芝恭子先生がカナダから持ち帰られた楽譜



「こどものさんびか《こどもとおかあさんのうた》」

たちと共に子どもたちへの音楽を楽しむこと、毎年創立記念日に父母の会のコーラスサークルが子どものために音楽会を開くことは、長く続けられていることです。それと同時に、記念の礼拝や行事の中で、共に歌うこと、共に聴くことも大切にされてきました。ここに節目の時の主なものを振り返ってみます。かえで幼稚園と、学院や大学との繋がりの中に豊かな歌や音楽の時間があつたことを思います。

かえで幼稚園と学院各部・関係者とが協力したおもな音楽行事	
1973年度	創設の年の保護者への講演「幼児の音楽について」(短期大学 芝恭子先生)
1983年度	10周年記念音楽会
1984年度	学院100周年記念音楽会
1980年代～1990年代	短期大学飯島千雍子ゼミによる音楽劇「ヘンゼルとグレーテル」
1993年度	中高部ハンドベル部によるコンサート
1997年度	25周年記念 卒業生による演奏／記念クリスマスコンサート／中高部ハンドベル部演奏
2005年度	学院120周年記念音楽会
2007年度	音楽会と保護者への講演「子どもが歌う時」(大学 眞理ヨシ子先生)
2013年度	40周年記念音楽会 村上陽一郎先生(学長・園長)のチェロ演奏と共に
2015年度	米山浩子さん(高等部卒業・オルガニスト)よりピアノが寄贈される。米山浩子さんの演奏による賛美と歌の集い
2019年度	松岡裕子さん(高等部、短期大学卒業・画家)から贈られた絵を前にしての賛美の集い
2021年度	大学チャペルコンサート(オンライン)にて、子どもたちが賛美

3. 保育者養成の中で、継承していきたい東洋英和の「うた文化」

早川史郎先生、眞理ヨシ子先生、飯島千雍子先生の後に、2017年度から大学の音楽表現関連の講義を受け持っている小井塚ななえ先生が、保育者養成に関わられている中での思いを寄せられました。

【大学保育子ども学科 小井塚ななえ先生より】

この度の「史料室だより」への取り組みを通して様々な方がたの思いやお働きに触れ、今後の大学の音楽教育はどのようにありたいのかを改めて考えるきっかけとなりました。

早川史郎先生は、作曲家としての大きな使命感を持って東洋英和に着任されたことを以下のように回想されています。—音楽大学でドイツ歌曲などを学

んで意気揚々東京都内の高校に奉職したある日、突然附属幼稚園に転属を命じられ、遅ましく生きる子どもたちの姿と、そして不幸にも「保育音楽」の貧困さを感じた。当時すでに中田喜直の「かわいいかくれんぼ」(野ばら社)や、ろばの会の「新しいこどものうた」(音楽之友社)などが出版され歌われているにもかかわらず、保育の現場は全く別世界の音楽に充ちあふれていた。いったいどうしたら新しいこどものうたを現場に伝え、子どもたちに歌ってもらえるかを考え悩んだ末に、その任を若い保育者に託そうと私は保育者養成大学に籍を移した。ろばの会の「新しいこどものうた」は、それまでの保育音楽とは異なり音楽性が高く、保育者の表現の段階でその伝達の系がとぎれてしまいがちであった。そこで保育者の表現技能に合わせながら原曲の音楽性をそこなわず弾き歌えるような楽譜集「現代こどもの歌1000曲シリーズ」全十巻(日音楽譜出版社、エー・ティー・エヌ)を1978年に出版し、現場にとどけることとした。約5000曲の力ある作曲家の作品を編曲した。—(記録より一部変更して抜粋)

早川先生は、ご自身が子どもたちと出会って心動かされた経験と、保育者養成の現場で学生たちが直面している課題と向き合う日々の中で、作曲家として新しいこどものうたを作ることと共に、原曲の世界観を大切にしながら作品をよりピアノで弾き歌いやすくする編曲の道を開拓なさっていかれました。

こうした保育者養成における音楽教育の理念を理解し、共に歩んだのが眞理ヨシコ先生です。眞理先生は、NHKの『うたのえほん』の初代うたのおねえさんを務めたご経験から歌唱の専門家として英和に着任され、「歌うこと」「歌を伝えること」を中心として学生指導に尽力されました。現在本学でピアノレッスンを担当されているピアニストの先生がたの数名は、眞理先生・早川先生の時代に着任され、子どもたちの歌を支え導くピアノの演奏法の指導に尽力されています。

私(小井塚)が、音楽関連の諸授業を構想し展開する中で、毎年悩ましく感じていることは、作品や曲集の選択です。東洋英和の保育者養成の長い歴史の中には、大切に継承されてきた「うた文化」があります。そして同時に学生が幼少期に歌っていた歌、現代の子どもたちが慣れ親しんでいる歌もあり、いつの時代も多様な歌(うた・唄)文化が交錯する場に保育者養成は存在してきたのだと思われまます。

1998年度の「音楽Ⅱ」の授業計画に、「こどもの音楽的活動の中心をなすものは、『うた』であろう。こどもはうたのあらかず世界の中で遊び戯れる」と記されており、保育者養成の学びの中でも「うた文



現在の大学での音楽の授業風景

化」、そして保育者の歌唱の力を重視していることがうかがえます。「歌は子どもと共にある」という基本的な考え方は、東洋英和の保育者養成の根底にずっと流れていたのだと受け止めています。こうした流れを継承しつつ、今後授業では、(1) 歌い伝えたい子どもの歌、(2) 今、日常的に歌われている子どもたちの歌、(3) 讃美歌、この3本柱のバランスを取りながら歌を選択し、東洋英和の保育者養成としてのミッションを果たしていきたいと思っています。

現在の学生たちにとっては、スマートフォンで歌の検索をしYouTubeの音源で歌を覚えることが、当たり前になってきています。私は、こうした世の中の流れに逆行するのではなく、緩やかに付き合いつつも、学生たちに「寄り道する楽しさ・大切さ」に気づいてもらいたいと願っています。歌集をめくると気になる曲名で手が止まったり、少しメロディーを口ずさんでみたりと、そうした道草をする中で新しい発見をしたり、忘れていた曲に出会い直したりすることがあります。直接的に欲しい情報のみにアクセスする方法とは違い時間がかかったり方向が変わってしまったりすることもあるでしょうが、そうした時間は子どもの遊びの時間にも似ていて、学生に大切なことを気づかせてくれると思います。

子どものために準備をする最初の経験の場が、大学付属かえで幼稚園をはじめとする教育実習・保育実習の場です。実習の中では「子どもたちと歌ううたを選んでくる」という課題や「この曲を子どもたちと楽しんで歌えるように準備してくるよう」といった課題が与えられます。そうした際に、様々な曲集や自分の幼少期の記憶、家族との会話、自然や目の前の子どもたちの姿の中にヒントや楽しさが隠されていることに気付いて欲しいと思います。時間と教育的な手間がかかることではありますが、子どもが歌と出会う姿、うたを大切に心にしまう姿、人と共有する姿を目の当たりする場として、保育の現場はとても貴重です。「自らが歌とのかかわり方を

拓いていける力」を養う教育を考えていきたいと思っています。

今後は、東洋英和で学ばれた多くの保育者がどのように歌と出会い、子どもたちと楽しんできたのか、そうしたエピソードを丁寧に収集しながら東洋英和の保育者養成における歌を通した音楽教育の理念、歴史を再考していきたいと思っています。

2021年11月、大学からかえで幼稚園への教育実習生が、歌唱指導のために与えられた数曲の選択肢から大中先生の作られた「いちょうのは」を選びました。その実習生はこれまで出会ったことの無い歌の物語の世界を感じ取り、子どもと自分の置かれている季節に目を向け、メロディーとリズムを丁寧に自分のものにしていき、子どもの前に座っていました。そして子どもと心を響き合わせていました。私は、小井塚先生の言われる東洋英和の「うた文化」が引き継がれる時を感じていました。



教育実習で歌唱指導のため子どもたちと歌う学生

4. おわりに

この記事を構想している時、芝恭子先生・飯島千雍子先生・土橋克子先生に電話でのインタビューをさせていただきました。私にとって、喜びであったことは、その表現こそ違いますが、三先生がそれぞれに同様の言葉を残してくださったことです。それは、「(子どもの頃の) 歌はずっと私の中にある。歌うことの究極は神さまを賛美すること」ということでした。加えて、芝先生の「みんなが命の中に音楽を持っている。そして命尽きるまで楽しむものが歌うこと」、飯島先生の「学生たちに『共に歌うことは一緒に生きること』と伝えたいという思いで過ごしてきた」、土橋先生の「子どもたちと歌うことが大好き、そしてそこに生まれる時間が大好きだった」というお言葉からのメッセージを受け取って、これからの音楽教育を考え楽しんでいきたいと思っています。

〈資料紹介〉40 中高部「道（ことば）」45年の変遷

神藤 真理（中高部国語科）

「道（ことば）」は1977年の創刊、今年3月発行の2021年度版で45号となった中高部国語科発行の冊子である。全学年生徒の作品の中から選ばれたものが掲載されており、全生徒、教職員、翌年度新生入に配布されている。今回はその変遷について紹介していきたい。

創刊の経緯

岡本幸江先生が書かれた「道」第2号編集後記によると、「戦前の“楓”は文芸誌であった。生徒の作文、和歌等」がその内容で、「年一回の学芸会（中略）と並んで学校の主たる文化活動の一つ」であった。「戦後、生徒会活動が活発となり、活動発表の場が必要となり、“楓”がその役割をも担って発行されることになったのだが、次第に「生徒会誌に文芸欄がある」状態となり、やがて「文芸欄なしの、純然たる生徒会機関誌になり了せた」。この「庇を貸して母屋を取られた感」を打開するために、国語科の先生方が文芸誌発行を決断した。それが「道」である。

誌名は黒川信也先生が校歌の歌詞「東の道（ことば）ある我が学舎」から採られた。黒川先生に伺ったところ、校歌の「道」にはいくつかの解釈があるけれども、この誌名には「英和は、私たちの進むべき方向を示す神の『ことば』が育まれる場所」との思いを込めましたとのお答えであった。

題字は影山暁美先生。表紙に金または銀で印刷された麗筆は、格調高い香気を放っている。印刷所は創刊時の大滝印刷から第19号よりカワマタ印刷に変わったが、表紙の佇まいはそのままである。なお、第5号より「表紙では何号かわからない」という声に応じて表紙にも号数を入れるようになった。



目次、巻頭言、挿絵、ページ数、内容の変化

目次を見ると、第10号頃まではジャンル毎に学年の垣根を越えての作品掲載である。随想、読書感想文、修学旅行記、創作（俳句、短歌、詩）等。当時行われていた国語科学習旅行の旅程、吟行の様子、句会で詠まれた俳句もあった。作品の傍には、生徒手描きの挿絵が優しい温もりを添えていた。

それが次第に学年の纏まりに移行してゆき、1994年度の第18号では現在のような学年毎の作品掲載の体裁となった。同時に、国語科専任教諭が持ち回りで書いていた巻頭言はなくなり、巻頭言のあったページには校歌と校舎の写真が載ることになった。細々と続いていた生徒の挿絵は第27号で終了した。

ページ数は創刊号が52ページ、第20号頃までは

第1号 (1977年)	第10号 (1986年)	第18号 (1994年)	第24号 (2000年)	第44号 (2020年)
みずみずしい心 わたしのまわりで 旅に思う 読書のあとに 身近所感 習作	巻頭言 詩 俳句 動物とわたし 感想 身辺の出来事 創作 私の考え・意見 「草」という題による 小さな話 作品論 作家論	十三歳の夏に 平和を守る道 感性を豊かに 読み比べ感想文 作家論 短歌コーナー 「国語表現」の 教室にて ・なぞなぞあそびうた ・詩の鑑賞 ・スピーチ ・川柳 ・私の意見 ・条件創作 ・折り句	中一 中二 中三 短歌・俳句コーナー 作品論 作家論 国語表現の教室にて ・川柳 ・課題作文 ・課題小論文 ・文末指定創作 ・スピーチ	中一 ・表現技法を意識した創作詩 ・入学を前に ほか 中二 ・短歌 ・現国課題作文 ほか 中三 ・俳句集 ・課題作文・小論文 高一 ・現代文 読後の考察 ほか 高二 ・作家論 ・小論文 高三 ・基礎国語 課題作文 ・現代文 リレー小説 ほか

〈「道」の目次の移り変わり〉

60～70ページといったところだが、徐々に増えていき、第25号が83ページ、第26号が103ページとなった辺りから急激にボリュームが増し、2013年度の第37号からは毎年100ページを超え、2019年度の第43号では192ページとなった。この勢いでは、200ページを超えそうである。

内容もまた、長閑な文芸誌がいつの間にやら英和の国語教育の発表の場との感を呈するようになった。挿絵がなくなった頃と符合するように学年毎の年間計画に沿った内容の作品になった。シラバスと共に見るとより明瞭である。中2の短歌、中3の俳句、高一の作品論、高二の作家論の定番に加えて教材毎の意見文、感想文、創作等が載るとい形が整い定着してきた。とはいえ、作品論を二作品の読み比べに変更するなど、多少の違いはある。これは担当教諭の意向によるもので、逸脱しない限りは担当教諭の裁量に任せるとい国語科のおおらかな姿勢を反映している。

「道」の変遷から垣間見えるもの

「道」の変遷には英和中高部の国語教育の流れが表れており、さらにその背後にある時代が見えてくる。高等部入試が1996～2002年度の7回実施され、中学部入試は2003年度よりA・B日程の2回実施となった。クラス数も4クラスから5クラスとなり、生徒数も増えた。

その流れの中で英和の教育内容も外に開かれていき、より整った形となっていった。入試体制も強化され、複数回の学校説明会、塾対象の説明会なども実施され、オープンスクールも開催されるようになった。「道」も個別相談等の部屋で展示され、受験生や保護者が英和の国語教育の一端を知る一助としての役割を果たしている。

「道」に受け継がれてきたもの 受け継がれていくべきもの

巻頭言を再読し、改めて国語科教諭の「道」に託す思いがひしひしと伝わってきた。執筆者は黒川信也先生はじめ、影山曉美先生、茂木啓子先生、林正子先生、寺澤東彦先生など。採用されたばかりだった伴野（旧姓「金野」）美香先生と私（旧姓「浅見」）



生徒（斉藤博子氏）による挿絵（第2号 1978年）

も執筆者として末席に名を連ねている。岡本幸江先生は第2号の編集後記を最後にご定年を迎えられたので、残念ながら巻頭言はない。

巻頭言に込められた先生方の思いは以下3点になると思う。

1. 書くことの意味は、一瞬の時をとめて記録していくことの大切さを知り、その証を示すことである。
2. 書くことは、ものが、自分が見えてくる行為であり、自分を育てる行為である。
3. 他者の心が捉えた世界に接することで、さらに開かれた心を持ち、豊かな交わりが一層深められる。

「道」は変容し続けているが、その根幹にある国語科教諭の思いは変わることがないと信じる。私たちの使命は「道」に託された先達の思いを心に刻み、一つ一つの作品に、生徒の思いに、真摯に向き合うことである。これからも「道」が「ことば」を通して生徒の心を育む場としての進化を続けていくことを切に願う。



オープンスクールでも活用されている「道」

〈東洋英和の先生がた〉8 栃内 禮子 先生



自己研鑽に裏づけられた

子どもを活かす教育実践

栃内先生の思い出

—多くの教え子に与えた影響—

史料室に来室する卒業生と在学時の思い出に話が及ぶと、1950年代後半から80年代にかけての幅広い小学部出身者から「先生のおかげで今の私がある」とお名前の上がるうちのお一人が、栃内禮子（とちない・のりこ／在任中の表記は礼子）先生である。

中畝治子氏（1964年小学部・1970年高等部卒、元小学部図工科講師）は5、6年生の担任が栃内先生になって自分の資質が開花したと語る。氏は中学部に進学してからも先生会いたさに小学部へ行き、月毎に児童の誕生日を祝う貼り絵作りのお手伝いをしたという。氏をはじめ同学年からは美大に進む人が多く、今も画家や造形作家等何人もが活躍している。先生は型にはめずに一人一人の芸術的な感性を大切にされ、また「表現すること」に強い関心をお持ちだった。ご自身がある意味型破りな面がある一方、持ち前の品の良さやマイルドな雰囲気も兼ね備えていたという。中畝氏は後年先生を「狐」に見立てて、何枚も「狐戯画」を描いた。先生もお気に入りで数年にわたり年賀状に使ってくださっていた。



中畝治子画「狐戯画」（1987年 栃内先生の年賀状）

「今持ちファイル」と「きょうの記録」

—記録の習慣を教える—

多くの影響を与えた栃内先生の指導は、具体的にはどのようなものだったのだろうか。

今号特集③の執筆者の加藤牧菜氏は、小学部時代の記録をデータ化していつでも取り出せるよう保管している。「栃内先生から、整理することと、記録することを教えていただいた」と語る。先生のクラスでは「今持ちファイル」と名付けた二つ穴ファイ

ルに、当座使うプリントを綴じ、必要がなくなれば捨てるか、別の保管用ファイルに移した。いわゆる「仕掛け」の書類も適切に管理するという発想であった。終礼時には「きょうの記録」という短い日記を、子どもたちは毎日欠かさず書いた。「卒業時に本にさせていただいたので、卒業アルバムと同じぐらい大切なもの」（神谷亜弥子氏／1981年小学部・1987年高等部卒）、また「時々赤いペンでコメントを書いてくださったときはすごく嬉しかった」と他の学年の卒業生からも声が上がっている。

栃内先生が小学部の記録の蓄積にも注力された痕跡は、小学部から史料室への移管資料に見てとれる。「校務行事プリント」は、主要な印刷物を年度ごとに製本したもので、全部で29冊ある。中には栃内先生の署名や押印、書き込みがあり、年度が在任期間（休職年度除く）に重なるため、ご自身のプリント類を基に保管用資料をまとめたものと考えられる。

「史料室だより」No.35（1991年3月29日）「小学部の史料を整理して：小学部史料整理会（仮）」では、倉本和先生（当時教頭）の発案で、栃内先生と図書室の野田文一郎先生の3人が知恵を寄せ合い、段ボール幾箱にも保存されてきた資料の整理に取り組みされた様子が語られている。「栃内先生には明晰な頭脳をフル回転して頂き次々と建設的な考えを示して頂いた」という第一次整理から数年を経てその時期の小学部の記録は見事に製本され、受け継がれている。

子どもたちを惹き付けた朗読クラブ

—声を出す楽しさ—

栃内先生は雑誌に数々の劇評を寄稿されるほど演劇に造詣が深く、1963年度は演劇クラブを指導、1972年度から朗読クラブを長く担当された。神谷氏は「栃内先生が好き過ぎて朗読クラブに入った」といい、「教科書を声に出して読む、教会のクリスマスイブ礼拝で聖書を朗読するなど、人前で読み上げる自信をつけていただいた」、他にも「5年生で朗読クラブに入って声を出すのが好きになり、6年生の運動会で放送係をするのを先生が後押ししてくださった」など、真っ先に浮かぶ思い出として教え子に語られている。

小学校教師としての研鑽 —勉強会を通して—

栃内先生は学生時代、福島県のある養護施設を休みごとに訪れ子どもたちと生活を共にするうちに、子どもに触れていくことの困難とすばらしさを感じ取り、子どもに関係した仕事をしたという気持ちを深めていった。様々な迷いの末、先輩の紹介で東洋英和の小学部に着任することとなったが、初年度から4年生を担任、そのまま6年生まで持ち上がり、続けて5、6年の担任をしながら、それぞれの段階で試行錯誤の連続であった。「今まで漠然と自分が考えてきた考えを、自前のものとして理論化し、自分自身がその中で変革されていかなければだめなのだ」と思い至りながらも踏み出せずにいたとき、英和の若い先生たちの中には同じように何か勉強したいと思っている人がいるのを感じとる。こうして着任5年目、1961年の夏休みに学内で「勉強会」が発足した。そしてテキストとして斎藤喜博氏の著作を取り上げたのが「島小教育」(今号p.5参照)との出会いであった。照屋美和子先生(今号p.2参照)は共に勉強したお一人である。

栃内先生は斎藤喜博先生の著作を繰り返し読み、学外の勉強会にも参加した。そうして創造的な授業を研究した結果、国語、特に詩の授業は、一語一語掘り下げて「自分の頭で考える」ことを教えられた、ワクワクする面白い授業だったと、中畝氏は語っている。また先生のクラスでは、児童主体の「グループ学習」が取り入れられていたのも特徴的であった。

子どもたちがクラスで意見を交わし、ぶつかり合い「発見」するための工夫を重ねながら、栃内先生は少しずつ、授業の中で「子どもが見える」と感じられるようになっていく。その10年の歩みが「乏しい歩みの中から」(斎藤喜博 編『現代の女教師 6 授業者の目』明治図書新書 1969年 所収)となって一般に出版された。

信仰・希望・愛

一人の力をこえたところで生かされる—

教えることに厳しい自己研鑽を重ねた栃内先生であったが、40代半ば頃から病に襲われ、療養のため幾度か休職された。その過程で先生ご自身の信仰が深まっていく様子を、小学部発行「めぐみ」への数多くの寄稿から辿ることができる。露木美奈子氏(1964年小学部・1970年高等部卒、元高等部長)によると「栃内先生は、狭い視野で聖書を捉えることを戒められていた」という通り、先生のお話は実体験と深い洞察力に結びついていた。

No.87(1982年11月26日)「時が満ちる」は、ご自身の病気療養からほどなく、職員早天礼拝で同僚

に向けて語られた言葉である。「やっと最近になって『福音』ということが浸み入ってこられるようになりました」といい、「『自分の十字架を負いつつ待つ』ということが、今後も『時満ちるまで』私の課題としていくことになるのでしょうか」と締めくくる。

No.113(1987年12月15日)では、星野富弘氏の詩に曲をつけた作品を通して、アドヴェントの過ごし方を「私は、改めて、これらの歌から学んだ『心からの喜び』『強い信仰』『希望と愛』そして『謙虚な心』について考えてみたい、そんな時にしたい、そしてそれらを、何らかの形で、ささやかでも人に伝え、行動に表していきたい」とまとめている。

No.117(1988年9月22日)では、多摩全生園の中にある教会で会員と時を共にし、かつてと現在を比べながら「解放されてきた、そして未来の見てきたような気もします。但し、そこに至るまでの大きな苦難の犠牲の上にここまで来たことを思うと、同じ人間としての痛みを感じないわけにはいきません」と語る。これが先生による「めぐみ」への最後の寄稿となった。

1989年8月、三度めの休職を経て、在職中に栃内先生は天に召された。教え子の一人は、常識ではなく良識のある人になりなさいと教えていただいたように思う、と語っている。

最後に、栃内先生が学院創立100周年の年に、永年勤続25年表彰への感謝を込めて記された言葉を紹介したい。

東洋英和100年(中略)子ども達が日々成長し、年毎に育っていくように、大人達もまた一人一人が日々新たになり、東洋英和の空気も常に浄化されていかない限り、次の100年は難しいでしょう。(中略)どんな立場のどんな人々でも、心身共に健康で過ごせるような、常に義と愛による新たな思いの東洋英和を創ってほしいと切望せずにはいられません。(「めぐみ」No.100記念号 1984年12月20日「100年の4分の1」より)

三笠 知世(史料室)

栃内 禮子(とちない・のりこ)先生

—略 歴—

1934年4月9日 誕生
1953年3月 立教女学院高等学校卒業
1957年3月 東京女子大学文学部日本文学科卒業
1957年4月 東洋英和女学院小学部教諭に着任
(1981年12月~1982年8月、
1984年4月~1985年3月、
1989年4月~1989年8月 病気療養のため休職)
1989年8月30日 召天(55歳)

利用統計 (2021年10月～2022年3月)

		10月	11月	12月	1月	2月	3月
展示見学者数		—	—	63	28	36	36
展示見学者区分	学内関係者	—	—	21	16	6	4
	一般	—	—	42	12	30	32
展示コーナーは、新型コロナウイルス感染防止のため休業していたが、2021年12月6日より展示を再開							
資料閲覧者数 (累計)		2	12	7	5	4	6
閲覧者区分	本学学生・生徒		2		3	2	2
	現教職員		3	1		2	4
	旧教職員						
	同窓生・学院関係者	2	2	1			
	同窓生 (研究者)						
	他校研究者・学生		5	4			
利用の目的	一般			1	2		
	年史編集						
	著述・論文作成		8	6	1	4	3
	伝記資料調査		1		2		
	記録類の調査・研究	1	3		2		2
	学院広報関係	1					
資料の種類 (重複あり)	その他			1			1
	東洋英和関係	2	11	5	5	4	6
	カナダの教会関係		4	1			1
	村岡花子関係		1	3			
	周辺地域史					1	1
その他							
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
月別レファレンス件数		16	14	11	10	10	9
質問者の区分	本学学生・生徒		1		1		
	現教職員	6	3	3	2	5	6
	旧教職員				1		
	同窓生・学院関係者	2	2	1	2	2	1
	同窓生 (研究者)						
	外部研究者・学生	7	5	6	2	1	1
	外部研究機関		1				
質問内容 (重複あり)	一般	1	2	1	2	2	1
	資料所蔵調査	4	4	6	2	4	2
	写真所蔵調査		4			2	
	事項調査	12	9	6	5	4	3
	その他	3	3	2	3	2	5

史料室の活動より (2021年10月～2022年3月)

(☆は複数回)

2021年10月

- ☆執筆／校正／編集—「史料室だより」No.97
- ☆執筆／校正—『日本歴史』『文書館・史料館めぐり』
- ☆照会—学外研究者より、制服の変遷について
- ☆照会—オックスフォード大学大学院生より、校友会・YWCA等について
- ☆校正—『港区史』のうち東洋英和に関する記述
- ☆2021年度村岡花子記念講座について、村岡家、生涯学習センター、学長室、史料室で検討・準備
- ☆140年史に向けた年表データ作成。各年史、逐次刊行物等を参考に採録作業 (酒井・谷川)
- ☆学院資料展示コーナー企画展「東洋英和の野外教育 野尻キャンプサイト50年を迎えて」準備
 - ・照会—トロント公共図書館梶原由佳氏より、特に1920—30年代の村岡花子と宣教師との交流について、村岡花子とミス・ショーとの関わりについて
 - ・7日 全国大学史資料協議会2021年度全国研究会にオンライン参加 (松本・三笠)
- ☆総務課と「楓園」93号の村岡恵理氏、平野キャシー氏対談のための準備
 - ・12日 学院資料展示コーナー展示替え (オリンピック・パラリンピック終了のため関連展示を撤収。公開は待機)
- ☆資料整理—文学会・文芸会関係
 - ・執筆—「楓園」93号「史料室レター」32
- ☆照会—山梨県立甲府城西高等学校3年生より、授業の探究活動において村岡花子についての調査希望あり。質問など

やりとり、村岡恵理氏にもご協力いただく。

- ☆資料整理—増加している寄贈品の整理
 - ・校正—大学学生支援課より、創立記念日配信用動画
 - ・照会—本学教員より、学院史料室のコレクションポリシー、年史編集に必要な資料について
 - ・展示コーナーにて、新任者オリエンテーション「東洋英和の沿革」説明 (松本)
 - ・照会—高等部長より、新マーガレット・クレイグ記念講堂についている照明機器は旧ヴォーリズ校舎からのものか？→当時のものではないことを画像などから確認
 - ・芹野与幸氏より、東洋英和女学校の旧ヴォーリズ校舎の建築中の画像に写り込んでいる人物が柿元栄蔵氏であることをご教示いただく。ヴォーリズ学園図書館太田典子氏からも関連記事をご提供いただく
 - ・村岡恵理氏より、英訳本『アンのゆりかご』のカナダでの書評などを転送いただく→カナダでのレジデンシャルスクール問題などについて情報交換
 - ・来室／調査—原光彦先生 (東京家政学院大学教授)。大江スミについて

2021年11月

- ・「史料室だより」No.97 発行、発送
- ・照会—高等部長より、終戦後1945年の学校授業再開について→9月6日に女学校は授業再開、小学生が集団疎開から10月に引き揚げ、11月に復興再開始業式を行った。関連の「教員日誌」などを紹介
- ・5日 高等部の創立記念礼拝に出席 (松本・三笠)

☆照会／来室／調査—学外研究者。社会事業関連資料
☆資料整理—ガーンネットハウス横浜 (GHY) 閉室に伴い運び
込まれた「保育部会」「かえで会」関連資料
☆照会／来室／調査—加藤牧菜氏。「史料室だより」No.98
音楽教育特集記事を執筆いただくため、小学部の「こども
さんびか」、鼓笛パレードの変遷、学芸会などについて
☆照会／来室／調査—本学学生2名。卒業論文のため
☆「史料室だより」定期講読希望者受付 (電話・FAX・メー
ルにて)。今後は60歳以上の同窓生については希望者を対
象に送付していく
☆校正—「楓園」93号
・資料整理—小学部音楽教諭—覧作成
・NHK知財センターより、村岡花子インタビュー映像 (開戦
の日について) のNHKアーカイブでの公開決定のおしらせ
(2021年12月8日より2025年まで公開予定)
・照会—井上琢智氏 (関西学院大学元学長) より、東洋英和
の「敬神奉仕」の歴史について、「敬神愛人」との関連から
知りたいとお尋ねあり→2018年の「敬神奉仕90周年」
冊子を紹介
☆資料整理—音楽科資料 (周年音楽会資料等)
☆展示再開のため関連部署と相談。換気機能等を確認
・来室／調査—村岡恵理氏。河井道関連資料

2021年12月

・来室—加藤牧菜氏。「史料室だより」No.98特集執筆のため
の照屋美和子先生 (元小学部音楽教員) へのインタビュー
結果を報告くださる
☆コロナ関係資料ファイリング、各種資料整理
☆執筆—Web掲載日本カナダ学会「カナダ豆事典」のうち「村
岡花子」「カナダ宣教師」の項 (松本)
・6日 学院資料・村岡花子文庫展示コーナー再開
・来室—中畝治子氏 (元小学部図工講師)。小学部での教育、
卒業生の障害者支援などの社会活動についてお話しただ
く
・16日 大学史資料協議会研究会に参加。新設の福澤諭吉記
念慶應義塾史展示館を見学 (松本・三笠)
☆校正—同窓会年表 (学院同窓会作成)
・照会—近隣住民の方より、海外ドラマ「アンという名の少
女」は『赤毛のアン』の原作通りなのか? →現代カナダの
視点が反映された二次創作といえる
・見学—東京都立小石川中等教育学校の探求活動 (*Anne of
Green Gables* 研究) の一環としてスティーブンス典子先生
と生徒が展示コーナーと史料室を見学。前身の東京府立第
五中学校の創設者、伊藤長七が東洋英和女学校で教員だっ
たことなども紹介
・インタビュー—安藤啓子氏 (1970年高等部卒)。「史料室だ
より」No.97の「資料紹介」を見て、富岡正男先生や音楽
部についてお話しくださる

2022年1月

☆来室／調査—高等部1年生。課外研究でスタンフォード
e-Japan への論文提出のため、生徒会の歴史と若者の政治
参加の関連について
・資料送付依頼—青山学院高等部より、パイプオルガン導入
の今後の参考にしたいため「史料室だより」No.50、51、
97をご希望
・校正—小学部母の会「ぎんなんだより」101号
☆大学で今年度開講の「東洋英和の歴史」について、大学教
員とシラバス等を協議
☆校正—『港区史 通史編』のうち東洋英和に関する記述
・資料貸出—北原白秋の校歌自筆原稿を、中上部国語科の依
頼で中2の授業のため一時貸出
・来室／調査—鈴木保美氏、阿曾千代子氏 (「図書館とともだ
ち・鎌倉」)。初期卒業生の間島愛子 (青山学院図書館や旧
鎌倉国宝館、図書館、学校建設に多大な寄付を行った) について
→愛子の姉妹も東洋英和に在籍していたことが判明
☆資料整理—高等女学科—中上部の英語教科書
・来室—かえで幼稚園大瀬知子園長。「史料室だより」
No.98特集記事執筆のため。芝恭子先生、飯島千雅子先生、
土橋克子先生へのインタビュー結果を報告くださる

☆校正—2023年度大学案内 歴史ページ
・資料整理—中上部「要覧」の一覧作成
・25日 カートメルセンター検討委員会陪席 (松本)
・26日 出版文化社アーカイブズセミナーにオンライン参加
(松本・三笠)
・26日 第3回 史料室委員会
☆資料整理—「各部行事予定」資料の補填、総務課保存分も
借りて作業。年表作成にも使用

2022年2月

☆資料整理—中上部地下倉庫、高等部長室、聖書科からの移
管資料のうち、修養会関係のファイルを整理統合
・照会—本学教員より、ミス・ハミルトンの東京女子大学理
事就任期間について
・照会—鳥居坂教会野村稔牧師より、「麻布教会」とある古
写真はメソジスト麻布教会か? →屋根の十字架など相違
あり。カトリックの麻布教会の可能性もある
・照会—副院長より、関西学院宗教センターの概要について
→関西学院宗教センターより組織や事務分掌についてご
教示いただく
☆大学新年度のフレッシュマンセミナーについて大学教員と
協議
☆資料整理—宗教委員会 (中上部) と宗教教育委員会 (学院)
資料
・執筆—「楓園」94号「史料室レター」33
・27日 村岡花子記念講座 山形政昭氏 (大阪芸術大学名誉
教授)「ヴォーリズの学校—そのキャンパス・デザインに
込めたもの—」(本講座は今回で最終回となる)

2022年3月

☆執筆／編集／校正—「史料室だより」No.98
・6日 オンライン研究会「女性ライブラリアンの歴史に光
を当てる—課題と展望」(基調講演小出いづみ氏)のうち、
ラウンドテーブルに梶田マリ氏 (元大学図書館事務長)、松
本 (史料室) 登壇
☆資料整理—飯島千雅子先生寄贈資料、短大新聞「楓」
・来室／調査—本学教員。大学「東洋英和の歴史」講義準備
のため年史類など
・校正—昭文社「Woman's STYLE 100《日本編》」のうち
村岡花子の項
・見学案内—安田学園様、安田ファシリティーワークス。展
示の参考事例として本校展示コーナーを見学
・校正—「楓園」94号
・来室／調査—高等部生徒。麻布十番商店街との協働事業に
向けて、「ザ・AZABU」バックナンバー等
☆かえで幼稚園と「保育だより」欠号の確認、照合作業

【おもな移管資料】

・中上部家庭科室より、文部省「中等被服一」(昭和19年)
／文部省「中等被服二」(昭和19年)／文部省「新しい憲法
のはなし」(昭和22年)／中等学校教科書株式会社「被服」
(昭和22年)
・中上部英語科より、(LL教室改修のため) 音声教材、「要覧」
に掲載されていない時代の英語教科書
・中上部事務室より、台帳類
・高等部長室より、歴代の部長たちが残した諸資料

【おもな受贈資料】

・小学部学年全体で録音したレコード (曲名「荒城の月」「お
江戸日本橋」「一つのこと」) 指導は照屋美和子先生
・1975年野尻キャンプしおり (資料「テントについて」「カッ
ターとボートの手引き」「ボート (Rowing boat) の扱い
方 (B)」添付)
・寄贈—高際伊都子氏 (1985年高等部卒) 経由、渋谷学園
藤真喜由子先生より、柳原白蓮の文字が染め抜かれた帯
(白蓮本人も使用、白蓮のお弟子さんが形見分けにいた
だいたもの)
・ヴォーリズ校舎時代のガラスのドアノブ (小型) 4点
・かつて小学部で着用したガーンネット色のベレー帽 (本来は
頭頂部にフェルトの円柱型のつまみがあったが紛失)
・ミス・マシューソンの追悼に関するはがき／ミス・マ
シューソン追悼式 (カナダのリッジウェイにて1986年5月

- 12日) John Parker牧師による追悼の言葉
- Richard B. Norton, *YMCA English Bible Series 2, The Parables of Jesus* (「Dulcie Cook」の印、標題紙にあり)
 - 創立百周年の東光会音楽会で合唱されたF.シューベルト「ドイツミサ曲」楽譜 (合唱は小学部母の会「コーラスの集い」、指揮は当時の小学部長の松本寛二先生)
 - 戦後の鳥居坂教会員の集合写真 (東洋英和の校舎内にて)。当時、鳥居坂教会の礼拝堂がない時代に英和内の講堂で礼拝を行っていたとのこと
 - 宣教師・英語教師のウェブスター先生、ダグラス先生、Vodia MacKay 先生の写真
 - 大学同窓会楓美会より2022年度カレンダー
 - 本学飯島千雅子名誉教授より保育教育関係の書籍や楽譜等資料多数
 - 長友玲子氏 (元中高部数学科教員) より、1970年の野尻キャンプで完泳した際に、体育教員から送られた手書きの証明書
 - 保育科関係書類 (入学手続き書類の入っていた封筒、入学許可書、学費・諸費領収証2年分、「諸注意 (昭和47年度)」、「東洋英和女学院学債募集についての依頼書」、保育部会関係書類)
 - 英語校歌「As Maple Leaf and Cherry Flower」楽譜 (印刷と手書き)
 - 鳥居美子氏 (元中高部社会科教員) の高等部卒業時のサイン帳 (先生がたのお言葉あり)
 - 「図書館ともだち・鎌倉」鈴木保美氏、阿曾千代子氏より、間島愛子 (初期卒業生) 関連資料多数
 - 東洋英和幼稚園の入学試験の書類一式と、小学部の入学案内・入学願書 (1958年)
 - 東洋英和女学校小学科第二学年文集「つくし」第一号
 - 八木和子氏 (元東洋英和幼稚園教員) より、鎌倉千楨、M. F. スクルトン編『やさしい基本的リズム曲集 幼稚園用』(昭和36年4月改訂版) / 東洋英和女学院短期大学編『やさしい基本的リズム曲集 (改訂版) 幼稚園用』(昭和48年11月改訂2版) ほか
 - 三校交歓会の際に交換した校章バッジ (東洋英和、静岡英和、山梨英和 計4個)
 - 父親有志の会より、28周年記念Blu-ray (5枚組)
- (書籍・雑誌・論文)**
- 鳥飼玖美子氏 (1964年高等部卒) より、自著『なんで英語、勉強すんの?』岩波書店、2021年
 - 岩崎寛子氏 (1966年高等部卒) より、ご息女の岩崎久美氏 (1997年高等部) 著『テーブルセッティングエレガンス』誠文堂新光社、2021年
 - 松岡裕子氏 (1957年高等部卒) より、『第45回 キリスト教美術展』図録
 - ヴォーリズ学園図書館太田典子氏より、「湖畔の声」2021年10月号、11月号 (東洋英和のヴォーリズ校舎の設計に關

- わった柿元栄蔵関連記事掲載)
- 刑部芳則氏 (日本大学准教授) より、自著『セーラー服の誕生 女子校制服の近代史』法政大学出版社、2021年 (画像提供、校正等で中高部・史料室協力)
 - 瑞木祥乃 (佐々木祥乃氏: 1973年短大卒) 『二十世紀嘆きの天使 三十代の「赤毛のアン」』鳥津書房、1988年
 - 露木明氏より、故白戸道子氏 (1944年幼稚園師範科卒) の日記を冊子にした『魚叟庵』
 - 佐藤浩代氏 (本学大学教員) より、「功刀嘉子の保育論—『保育要領』作成への関与に着目して—」『保育学研究』第59巻、第2号、2021年別刷
 - 山中理彩氏 (2021年度高等部3年) による河本緑石についての論文掲載の『ふらここ』(河本緑石研究会機関誌) 第12号、2021年
 - 河野和雄氏 (元中高部音楽科教員) より、河野和雄編『譜面通りでない 讚美歌前奏・伴奏曲集』
 - 『日本歴史』2022年3月号 (「文書館・史料館めぐり」に当史料室が寄稿)
 - 山形政昭氏 (大阪芸術大学名誉教授) より、共著『ウィリアム・メレル・ヴォーリズ—失意も恵み—』ミネルヴァ書房、2021年
 - 小出いずみ氏 (1969年高等部卒) より、自著『日米交流史の中の福田なをみ—「外国研究」とライブラリアン—』勉誠出版、2022年 (調査協力)
 - 熊田凡子氏 (関東学院大学准教授) より、自著『日本におけるキリスト教保育思想の継承 立花富、南信子、女性宣教師の史料を巡って』教文館、2022年 (調査協力)
 - 沖祐子氏 (1977年高等部卒) より、『日本現代服飾文化史』講談社エディトリアル、2022年 (画像提供・校正協力)
 - 島内桂乃氏 (大田区在住小学生) より、「村岡花子がほんやく家として活やくできた3つの理由」が掲載された大田区教育研究会 小学校社会科学研究部『わたしたちの郷土研究』72、2022年 (調査協力)
 - 村岡美枝氏・恵理氏より、L.M. モンゴメリ著、村岡花子訳 (翻訳編集 村岡美枝 村岡恵理) 『赤毛のアン』講談社、2022年 (邦訳70周年の記念版)
 - 赤松佳子氏 (ノートルダム清心女子大学文学部教授) より、自著『赤毛のアンから黒髪のエミリーへ L・M・モンゴメリの小説を読む』御茶の水書房、2022年

【おもな画像データ・資料提供】

- 『港区史』掲載のため、初期校舎の画像など4点
- 大学創立記念日用配信動画のため、ミス・レーマン、師範科、東洋英和幼稚園、かえで幼稚園画像多数
- 同窓会クリスマス礼拝動画のため画像6点
- 高等部長へ、長野彌先生関連画像ほか18点
- 『日本現代服飾文化史』掲載のため、もんべ姿の女学生の画像4点

🌸 展示コーナー再開のお知らせ

「学院資料・村岡花子文庫展示コーナー」(六本木校地 本部・大学院棟1階) は、新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡散防止のため、休業しておりましたが、2021年12月6日より展示を再開いたしました。ただし感染拡大の場合は、ふたたび展示コーナーは休業とさせていただきます。告知は東洋英和女学院ホームページ等で行います。

🌸 既刊の「史料室だより」もお読みになれます

「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。「東洋英和 史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。

URL: <https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>

🌸 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあつてご不要のものがございましたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】 東洋英和女学院史料室 〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40

Tel 03-3583-3166 (直通) Fax 03-3583-3329 E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp